

「ヨハネによる福音書」を読む（第10回）

ヨハネ福音書 第18、19章

2010年4月11日（東京 新宿）

●イエスが捕えられてから十字架にかけられるまで

私はいつもならヨハネ福音書を独立に取り上げて、あまり他の福音書がどうなっているかということには関係なしに読む。ヨハネはヨハネの独自の世界がある。ヨハネは歴史的な記事の順序は無視して、一番ヨハネが言いたいことを端的に、しかも集中的にぶつけて言っているという福音書です。だから、非常に味わい深いものがあります。ところが、この今日やります所だけは、そう簡単ではない。

最後の晩餐の話が終わって、それから十字架にかかれるまでの時間的経過、わずか二日ほどのことです。木曜日の晩から金曜日の夕方にかけての出来事で、一日半ほどの出来事がどの福音書也非常に詳しく書かれている。そうなりますと、いかにヨハネだけが独立していると申ししても、他の福音書ではどのように書いているのだろうかということ、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ全部を細かく点検してみました。そうしますと、かなりのいろんな違いを発見します。食い違いと言いますか、力点の置き方がちがう。そのどれが本当に正しいのか、そんなことを私が決める立場でもありませんので、それぞれの福音書を辿りたいと思います。

力点はヨハネにあとで置きますけれども、まずヨハネへ行く前に、マタイ・マルコ・ルカの福音書で十字架の前夜の場面、イエスが捕えられるところから十字架にかけられるまでをどんなふうに書いているかを辿ってみたいと思います。（フランススコ会訳新約聖書巻末の「キリスト時代のエルサレム」地図の説明省略）

だいたい、マタイとマルコはよく似ている。もともとマルコ伝が下敷きになって、それをベースにしてマタイ伝が書かれたと言われているので、記事は似通っています。ほんの少し違っている程度です。ルカ伝はまたマタイ、マルコとかなり違っているところがあります。

聖書の訳もちよつとずつ違う。聖書学者でない私には、どちらを取っていいのかかわからない。たとえば、

「あなたは王であるか？」

とピラトが聞きます。

「それはあなたの言っていることである」



という訳がついていたり、イエスが

「そうだ、その通りだ。私は王だ」

と仰る言葉と、「それは人が言っていることだ」という、そういうのが入り交じっている。イエスがそういう尋問を受けるのは、二か所ある。イエスが捕えられた夜、大祭司カヤパの家へ連れてこられ、そこで大祭司や長老や律法学者たちが集まって、イエスを尋問する場面があります。そこで、「どういう罪だ」ということを決める。それが済んで夜明けになつてからピラトの所へ連れて行く。

「夜明方にピラトの所へ連れて行つた」

というのはどれも共通なんです。けれども、連れて行く前にその前夜にどんなことがあつたかというのが福音書によつてかなり違う。ヨハネの福音書なんかは、いきなりピラトの所へ行く。始めにアンナスの所へ送つて、それからカヤパの所へ行つて、その次の朝にピラトの所へ送る。ルカ伝になるとまた違つて、ピラトの所へ送りますと、今度はピラトはヒロデの所へ送る。ヒロデも調べてみたけれども、どうもあまり罪がないということ、またピラトへ送り返す。

「その時にピラトとヒロデは仲良くなった」

ということがルカには出てくるけれども、そんなことはマタイ、マルコ、ヨハネには全然出てきません。こんなふうにやや違う。

それから面白いのは、ペテロがイエスを知らないと言つた場面はどれも共通なんです。ただ、

「鶏が何回鳴くか」

というのが違っている。「二度鳴く」という福音書と、一度しか鳴かないのとある。つまり要するに、

「三度、イエスを知らん」

と言つた時に鶏が鳴くのは共通なんですけれども、「二度鳴く」と言われている福音書ではやはり、

「ここで一回鳴いた。それからここで二回目に鳴いた」

ということが書いてある。ペテロは可哀相にも、他の福音書は大体いろんな食い違いがあつたりするのに、「ペテロが否んだ」ということは三つとも共通です。イエスが捕えられて裁判を受けてどうするということには、「ペテロがイエスを知らないと言つた」ということは関係ない。裁判ということからしたら、イエスが主人公の被告人ですから。ところが、所々、「ペテロがその時、火にあたっていた」とか、女中が来て「お前はイエスと一緒にいた」と言つたとか、そういうふうなものが入ってくる。これはペテロが

「あなたと一緒に死んでもかまいません。どこまでもお守り申します」

と、あんな大口をたたいたでしょ。それに対して、イエスが



「いやいや、そうはいかんだ。お前の信仰がなくならないように私は祈ったよ」

とまで、ルカ伝には書かれている。それがあるものですから、やはり、ペテロにしっかりと「イエスなんか知らない」と言わさないと承知しないという舞台設定のように思いますが、でもこれは笑いながらしゃべっていますけれども、人間というのはそういうものなんです。どんなに心では、意志では、気持ちでは、「こうありたい」と願っていても、現実の場面にきたら、もうオタオタしてしまつて、「知らない」と言う、これが人間の肉の弱さなんです。だから、肉の弱さでは信仰というのは貫けない。そのことをはつきりと示していると思います。

だから、これは皆さんに申し上げておきたいけれども、「私は信仰が強い」とか、「弱い」とか、そういうことに拘^{こだわ}らないように。そもそも「信仰」というのは、神さまが守って保つてくださるものであつて、それぬきで自分一人の頑張りで信仰を貫くなんて、これはしんどいだけです。気持ちは大事です。「かくありたい」という気持ちは大事なんですけれども、やはりイエスさまを慕う、神さまを慕う、

「神さまの御意にかないたい」という気持ち、その意志だけではどうにもならない」ということを、ペテロのあの姿で表していると思う。そうしたら、これに何が加わらなければならぬかというところ、聖霊なんです。人間の意志だけでは貫けない。そこに聖霊というお方がおいでくださつて、一人ひとりの中に入ってください、

「私がお前と一緒にいる。私がお前を包んでいる。私がお前の中で祈っている。私がお前に力を与える」

と。こちらのほうが原動力になつて、そしてこの我々の人間的な意志というものを支え、いい方向へ導いてくださる。この二つがなければだめ。聖霊だけがどんなに頑張られても、人間がそつぽを向いてますと、聖霊はどうにもできない。だから、人間は十字架の上で、

「主よ、私のことを憶えてください」

と言つたら、

「お前は今日、私と一緒にパラダイスだ」

と言われた。これですね。

これは人間の側からの翻^{ひるがえ}りというか、方向転換、これは「悔い改め」とかいう言葉で呼ばれたりします。「悔い改め」というのは方向転換なんです。イザヤ書で、

「人はみな自分の勝手な方向に進んでいる。神さまをそつちのけにして勝手な方向に進んで行つた。そういう罪をイエスに負わせて、我々の神さまから離れていくような罪をお赦しくださつた」

ということが出てきます。それに引き続いて、しかもイエスが今日読みますような、本当に無惨な姿です。それはイザヤ書53章が言ってますように、



「彼は私たちの咎のために、罪のために砕かれた。そして、その打たれし傷によつて我々は癒された」

と。罪の赦しと病の癒しという、道徳的な人格的な罪の赦しという面と、肉体的な最後は死に至る病を、全部キリストはご自分の死を通して滅ぼしてくださった。死は叩き潰されたんですね、十字架で。そういうことに我々は出会いますと、我々の心は、心の砕けというのが出てきます。心の砕けというものを体験しますと、方向転換ということが起こってくる。そうしたら、

「主に従つて行こう」

という意志が芽生えてくる。その芽生えてきた意志に、今度は「聖霊を注ぐよ」ということがヨハネ伝14章から出てきます、

「助け主を送る」

という。こういうことで初めて私たちは本当の主の弟子と言うことができるわけです。「主の弟子である」ということは同時に「僕である」ということです。僕は主の心を大事にします。これが一番尊いわけです、自分にとつて。

「わが思いではなく、あなたの御意を」
みこころ

と。我々はこの十字架を通つて初めてやつとそういうところへ到達する。ペテロだって同じです。

ところが、イエスという方は違うんですね。まず水のバプテスマをヨハネから受けられて、祈つておられたら天が開けて、聖霊が鳩のごとく降ってきた。それから荒野へ行つて、サタンと四十日間闘いをなされた。そして、聖霊に満たされて、伝道を始められた。ですから、このお方は意志の面と、それからこの聖霊とは、あの時からピシツと備わっていたわけです。だから、このお方の歩み方というのは、肉なる人間とはまるで方向が違うものだから、宗教家たちは自分たちの肉の判断で審いたわけです。そして、

「十字架につけろ、十字架につけろ！」

と、そこへ極まった。ですから結局、主イエスにおける悲劇というのはこういう生き方をなさったということ。この世の我々はそれとは別次元に生きてますから、仮に意志があつてもそうじゃないし、意志のないやつがたくさんおるわけです。

「神さまなんかクソくらえ、俺たちの天下である」

と言つて、我が世の春を謳歌している者たち。それから、仮になんとか神に従いたいと思つても、弟子にしてもらつてもなお従えないという者がありますから。こういうことを一応念頭に置いていただいて、それでマタイ伝のほうから見ていきましょう。

それで、文語訳があり、新共同訳があり、新改訳があり、フランシスコ訳がある。それから昔の教会の口語訳聖書がある。どれでもよろしいと思います。



●オリーブ山へ出かけた（マタイ26章）

マタイ伝で言いますと、26章の30節からです。新共同訳で読みます。

「³⁰一同は賛美の歌をうたつてから、オリーブ山へ出かけた。

³¹そのとき、イエスは弟子たちに言われた。「今夜、あなたがたは皆わたしにつまずく。『わたしは羊飼いを打つ。すると、羊の群れは散ってしまう』

ゼカリヤ書に出てくる言葉です。

と書いてあるからだ。³²しかし、わたしは復活した後、あなたがたより先にガリラヤへ行く。」³³するとペトロが、「たとえ、みんながあなたにつまずいても、わたしは決してつまずきません」と言った。³⁴イエスは言われた。「はっきり言っておく。あなたは今夜、鶏が鳴く前に、三度わたしのことを知らないと言うだろう。」³⁵ペトロは、「たとえ、御一緒に死なねばならなくても、あなたのことを知らないなどとは決して申しません」と言った。弟子たちも皆同じように言った。

³⁶それから、イエスは弟子たちと一緒にゲツセマネという所に来て、「わたしが向こうへ行つて祈っている間、ここに座っていなさい」と言われた。³⁷ペトロおよびゼバイの子二人を伴われたが、そのとき、悲しみもだえ始められた。³⁸そして、彼らに言われた。「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、わたしと共に目を覚ましていなさい。」³⁹少し進んで行って、うつ伏せになり、祈って言われた。「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに。」⁴⁰それから、弟子たちのところへ戻つて御覧になると、彼らは眠っていたので、ペトロに言われた。「あなたがたはこのように、わずか一時もわたしと共に目を覚ましていられなかったのか。⁴¹誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心は燃えても、肉体は弱い。」⁴²更に、二度目に向こうへ行つて祈られた。「父よ、わたしが飲まないかぎりこの杯が過ぎ去らないのでしたら、あなたの御心が行われますように。」⁴³再び戻つて御覧になると、弟子たちは眠っていた。ひどく眠かったのである。⁴⁴そこで、彼らを離れ、また向こうへ行つて、三度目も同じ言葉で祈られた。⁴⁵それから、弟子たちのところに戻つて来て言われた。「あなたがたはまだ眠っている。休んでいる。時が近づいた。人の子は罪人たちの手に引き渡される。」⁴⁶立て、行こう。見よ、わたしを裏切る者が来た。」

⁴⁷イエスがまだ話しておられると、十二人の一人であるユダがやって来た。

つまり、ゲツセマネでイエスが必死になって祈っておられる。祈りを終えるか終えないいうちにもうユダがやって来た。



祭司長たちや民の長老たちの遣わした大勢の群衆も、剣や棒を持って一緒に来た。

ここには「祭司長」とあります。フランススコ訳では「大祭司や、民の長老たちから遣わされた多くの人々が、剣や棒を持ってユダについて来た」

とある。「大祭司」と訳している訳と、「祭司長」と訳している訳とがある。いったい「祭司長」というのは何なのか？ 祭司は何人おるんだ？と。祭司は本来一人なんですね。けれども、世襲制だったようです。しかも権力者によつて途中引退させられて、アンナスというのが生きていましょ、カヤパというのがその次の跡継ぎです。

「アンナスはカヤパの舅しゅうとである」

とヨハネ伝に出てきます。そういうふう引退祭司も大祭司の中に入れられるということ、祭司も複数居ったようです、この頃。その中で一番親王的なのは現職の人なんでしょう。それが「祭司長」ということになるのでしよう。ここは「祭司長」と書いてあるけれども、マタイ伝の26章65節には

「大祭司は服を引き裂きながら言った」

という、今度は「大祭司」になっていますから、統一的に考えれば「大祭司」でいいのではないかと思いますが、そういう小さいことは無視しまして、共同訳で読んでいきますと、

「剣や棒を持って一緒に来た。」

という。しかも、そういう祭司長あるいは大祭司や民の長老たちに煽動されて、手先になって大勢の群衆も剣や棒を持って一緒に来た。ここには「兵隊」は居らんですね。ところが、ヨハネ伝には「兵隊」が出てきます。どこの兵隊かということになるわけですが。マタイ伝やマルコ伝には兵隊は出てきません。ユダヤ人ばかりです。「兵隊」というと特にローマの兵隊ということになる。ここでは民衆たちも唆そそのかされて、剣や棒を持ってやって来た。

⁴⁸ イエスを裏切ろうとしていたユダは、「わたしが接吻するのが、その人だ。それを捕まえろ」と、前もって合図を決めていた。⁴⁹ ユダはすぐイエスに近寄り、「先生、こんばんは」と言つて接吻した。⁵⁰ イエスは、「友よ、しようとしていゝことをするがよい」と言われた。すると人々は進み寄り、イエスに手をかけて捕らえた。⁵¹ そのとき、イエスと一緒にいた者の一人が、手を伸ばして剣を抜き、大祭司の手下に打ちかかつて、片方の耳を切り落とした。

これはルカ伝では、ペテロということになっている。

⁵² そこで、イエスは言われた。「剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる。⁵³ わたしが父にお願いできないとでも思うのか。お願いすれば、父は十二軍団以上の天使を今すぐ送ってくださいるであろう。⁵⁴ しかしそれでも、必ずこうなると書かれている聖書の言葉がどうして実現されよう。」



⁵⁵またそのとき、群衆に言われた。「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持って捕らえに来たのか。わたしは毎日、神殿の境内に座って教えていたのに、あなたたちはわたしを捕らえなかった。⁵⁶このすべてのことが起こったのは、預言者たちの書いたことが実現するためである。」このとき、弟子たちは皆、イエスを見捨てて逃げてしまった。

これがイエスの弟子の姿です。あんなに気張って頑張ってペテロが言った。

「他の弟子たちも同じように言った」

と、異口同音に言ったと書いてある。だから、ペテロばかりではないけれども、それが全部逃げ去ったということです。

ここに「十二軍団」というのが出てきます。フランシスコ会訳の註によりますと、「十二」というのは完全数を表す。ローマの一軍団、ギリシア語では「レギオン」というそうですが、「ローマの一軍団は六千人からなる。これに比べるとペテロの剣の力などは取るに足りない」

という説明がある。一軍団で六千人も居るとしたら、十二軍団といったら物凄い数の天使たちがやってくる。そしたら、

「あなた方は何百人居ろうと、そんなものは問題ではない。しかし、それをお願いすれば、神さまのご計画が全部つぶれてしまう。だから、それはやらない」

と。だから、イエスは弱虫で捕まっているのではない。本当にその気になってお祈りになったら、捕まえに来たやつなんか全部そこでぶっ倒されてしまいます。それだけの力をお持ちなんですけれども、それをやれば、せつかくの御意が成らない。^{みこころ}つまりゲッセマネで祈られたでしょ。

「これが本当に御意なんですか。私はこれから酷い目にあうことになっている。それが本当に御意なんでしょうか？」

と言って祈られた。やはりそうだということになって、それでこのような記事につながっていくわけです。

⁵⁷人々はイエスを捕らえると、大祭司カイアファのところへ連れて行った。

そこには、律法学者たちや長老たちが集まっていた。⁵⁸ペトロは遠く離れてイエスに従い、大祭司の屋敷の中庭まで行き、事の成り行きを見ようと、中に入って、下役たちと一緒に座っていた。

これはヨハネ伝によりますと、ペテロは始め外に居る。ところが、ペテロと一緒に居たもう一人の弟子——これは多分ヨハネであろうと言われている——ヨハネは大祭司と知り合っていたので、外に立っているペテロを中へ引き入れたという記事になっている。ところが、マタイのほうではそんなことに関わりなく、ペテロは中に入って、下役たちと一緒に座っていた。



59さて、祭司長たちと最高法院の全員は、死刑にしようとしてイエスにとって不利な偽証を求めた。⁶⁰偽証人は何人も現れたが、証拠は得られなかった。最後に二人の者が来て、⁶¹「この男は、『神の神殿を打ち倒し、三日あれば建てることができる』と言いました」と告げた。⁶²そこで、大祭司は立ち上がり、イエスに言った。「何も答えないのか、この者たちがお前に不利な証言をしているが、どうなのか。」⁶³イエスは黙り続けておられた。大祭司は言った。「生ける神に誓って我々に答えよ。お前は神の子、メシアなのか。」⁶⁴イエスは言われた。「それは、あなたが言ったことです。」

ここなんです。文語訳では、「その通りだ」とはつきり書いてある。このあたりはどうもよくわからない所です。文語訳では、

「⁶³……大祭司いう『われ汝に命ず、活ける神に誓いて我らに告げよ、汝はキリスト、神の子なるか』⁶⁴イエス言い給う『なんじの言える如し。……』」

と、はつきり文語訳ではなっているけれども、この共同訳を見ますと、

「それは、あなたが言ったことです。」

と。「わしや知らん」という感じがちよつとするでしょ。

しかし、わたしは言っておく。あなたたちはやがて、人の子が全能の神の右に座り、天の雲に乗って来るのを見る。」

こういうことを言われたものだから、こういう証言を引き出した以上はこれで十分だというふうになる。

⁶⁵そこで、大祭司は服を引き裂きながら言った。「神を冒瀆した。これでもまだ証人が必要だろうか。諸君は今、冒瀆の言葉を聞いた。⁶⁶どう思うか。」人々は、「死刑にすべきだ」と答えた。⁶⁷そして、イエスの顔に唾を吐きかけ、こぶしで殴り、ある者は平手で打ちながら、⁶⁸「メシア、お前を殴ったのはどれか。言い当ててみる」と言った。

だから、ここでもう既に、カヤパの所へ連れていって、そこでもう大祭司を頂点とするひとつの集会が開かれてしまった。あの「衆議所」ではない。カヤパの庭です。そこでそれがユダヤの法廷みたいなことになっているわけです。そしてもう「死刑に値する」という死刑判決をやっていることになります。

そして、さっき言いましたペテロが出てくるわけです。

⁶⁹ペトロは外にいて中庭に座っていた。そこへ一人の女中が近寄って来て、「あなたもガリラヤのイエスと一緒にいた」と言った。⁷⁰ペトロは皆の前でそれを打ち消して、「何のことを言っているのか、わたしには分からない」と言った。⁷¹ペトロが門の方に行くと、ほかの女中が彼に目を留め、居合わせた人々



に、「この人はナザレのイエスと一緒にいました」と言った。⁷²そこで、ペトロは再び、「そんな人は知らない」と誓って打ち消した。⁷³しばらくして、そこにいた人々が近寄って来て、ペトロに言った。「確かに、お前もあの連中の仲間だ。言葉遣いでそれが分かる。」⁷⁴そのとき、ペトロは呪いの言葉さえ口にしながら、「そんな人は知らない」と誓い始めた。するとすぐ、鶏が鳴いた。⁷⁵ペトロは、「鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」と言われたイエスの言葉を思い出した。そして外に出て、激しく泣いた。（マタイ26・30～75）

これでしたら、鶏は二度は鳴いてません。別の所で「二度鳴く」ということが出てくるけれども、ここでは三回一遍にここで「知らない」と言ったことになっています。27章、

「一夜が明けると、祭司長たちと民の長老たち一同は、イエスを殺そうと相談した。²そして、イエスを縛って引いて行き、総督ピラトに渡した。

そのあとでユダが自殺するという場面が出てきます。

この最後の場面を見ますと、まず捕えられて、ユダヤ人たちの最高機関、カヤパは衆議会の議長でもある、その大祭司の下での集会においてイエスを断罪するわけです。断罪して死刑にしようとしたところで、自分たちには死刑にする権限はない。ローマだけができるわけです。だから、ピラトの許しを得ないとイエスを十字架に付けられない。そこでピラトの所へ持つていくという二段構造になっています。

●ピラトの所へ行く（マルコ14章）

そこで、ピラトの所へ行くまでの記述をまず見ておきたいと思います。マルコ伝では14章です。イエスを殺す計画というのが出てきて、ユダが裏切りを企てる場面があり、それから過越の食事がなされます。そして主の晩餐が出てきます。ペテロが躓くということを抑るのが14章27節から出てきます。

「私は羊飼いを打つ。すると羊は散ってしまう」

ということが出てきます。そして、ペテロのことですね。

「³⁰イエスは言われた。「はつきり言っておくが、あなたは、今日、今夜、鶏が二度鳴く前に、三度わたしのことを知らないと言うだろう。」³¹ペトロは力を込めて言い張った。「たとえ、御一緒に死なねばなくなっても、あなたのことを知らないなどとは決して申しません。」皆の者も同じように言った。

それから、ゲッセマネの祈りが出てきます。そして、その終りのほうへ行きますと、

⁴¹イエスは三度目に戻って来て言われた。「あなたがたはまだ眠っている。休んでいる。もうこれでいい。時が来た。人の子は罪人たちの手に引き渡される。

⁴²立て、行こう。見よ、わたしを裏切る者が来た。」



⁴³さて、イエスがまだ話しておられると、十二人の一人であるユダが進み寄って来た。祭司長、律法学者、長老たちの遣わした群衆も、剣や棒を持って一緒に来た。

マタイ伝と全く同じですね。そして、ユダが近づいて来て、

⁴⁴イエスを裏切ろうとしていたユダは、「わたしが接吻するのが、その人だ。捕まえて、逃がさないように連れて行け」と、前もって合図を決めていた。

⁴⁵ユダはやって来るとすぐに、

そのようなことをやった。イエスのお答えもマタイ伝と一緒にです。弟子たちは逃げた。それから、イエスに付いて来た若者がいて、捕えようとしたら逃げたという話が出ます。そして、⁵³節から、

⁵³人々は、イエスを大祭司のところへ連れて行った。祭司長、長老、律法学者たちが皆、集まって来た。⁵⁴ペトロは遠く離れてイエスに従い、大祭司の屋敷の中庭まで入って、下役たちと一緒に座って、火にあたっていた。⁵⁵祭司長たちと最高法院の全員は、死刑にするためイエスにとって不利な証言を求めたが、得られなかった。……

⁶⁰そこで、大祭司は立ち上がり、真ん中に進み出て、イエスに尋ねた。「何も答えないのか、この者たちがお前に不利な証言をしているが、どうなのか。」⁶¹しかし、イエスは黙り続け何もお答えにならなかった。そこで、重ねて大祭司は尋ね、「お前はほむべき方の子、メシアなのか」と言った。⁶²イエスは言われた。「そうです。」

ここでは「そうです」とイエスご自身がはつきり言って、「それはあなたが言うことです」という答えにはなっていない。

あなたたちは、人の子が全能の神の右に座り、天の雲に囲まれて来るのを見る。⁶³大祭司は、衣を引き裂きながら言った。「それでもまだ証人が必要だろうか。⁶⁴諸君は冒瀆の言葉を聞いた。どう考えるか。」一同は、死刑にすべきだと決議した。

それから侮辱するわけです。その次にペテロが出てきます。

⁶⁶ペトロが下の中庭にいたとき、大祭司に仕える女中の一人が来て、⁶⁷ペトロが火にあたっているのを目にすると、じつと見つめて言った。「あなたも、あのナザレのイエスと一緒にいた。」⁶⁸しかし、ペトロは打ち消して、「あなたが何のことを言っているのか、わたしには分からないし、見当もつかない」と言った。そして、出口の方へ出て行くと、鶏が鳴いた。

ここで鶏が一回鳴いている。

⁶⁹女中はペトロを見て、周りの人々に、「この人は、あの人たちの仲間です」



とまた言いだした。⁷⁰ペトロは、再び打ち消した。しばらくして、今度は、居合わせた人々がペトロに言った。「確かに、お前はあの連中の仲間だ。ガリラヤの者だから。」⁷¹すると、ペトロは呪いの言葉さえ口にしながら、「あなたがたの言っているそんな人は知らない」と誓い始めた。

神かけて誓うぞ、そんなやつは知らない」と呪いの言葉さえ口にしながら」というから相当なものです。

⁷²するとすぐ、鶏が再び鳴いた。

ここで二度鳴いた。

ペトロは、「鶏が二度鳴く前に、あなたは二度わたしを知らないと言うだろう」

とイエスが言われた言葉を思い出して、いきなり泣きだした。

そして、15章へ行きますと、

「夜が明けるとすぐ、祭司長たちは、長老や律法学者たちと共に、つまり

最高法院全体で相談した後、イエスを縛って引いて行き、ピラトに渡した。

と書いてますから、さっきのマタイとマルコでは、捕まえられた夜にもうそこで彼らの、いわゆる自分たちの仲間による裁判で死刑に値するということを決めているわけです。夜明けにならないと、ピラトの所へ行けませんので、夜明けには再び決議する必要があるのです。「さあ、連れて行く」という程度の話をして連れて行ったということになります。

●最後の晩餐（ルカ22章）

次にルカのほうを見てください。ルカではどういふふうになっているか。22章です。最後の晩餐の所があつて、31節を見ますと、ペテロに対して

「今夜はひどいことがある。あなたはサタンに振り回されることになる」

ということを抑るわけです。

「³¹シモン、シモン、サタンはあなたがたを、小麦のようにふるいにかけることを神に願って聞き入れられた。³²しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」

イエスの思いやりですね。

「もうこれはしょうがない。お前は、今晚はしょうがないよ」

と言われたのに、ペテロは

「いやいや、絶対にそんなことはありません！」

と言うわけです。

³³するとシモンは、「主よ、御一緒になら、牢に入っても死んでもよいと覚悟しております」と言った。³⁴イエスは言われた。「ペトロ、言っておくが、あ



「あなたは今日、鶏が鳴くまでに、三度わたしを知らないと言うだろう。」

ここでは、「鶏が二度鳴く」というのは出てきません。

「鶏が鳴く前に三度私を否むだろう」

と。それから、ルカ伝では使徒たちに対して、

「今までは、剣も何も必要なかった。今晚は、サタンが天下だ。だから、剣や財布だとかを全部自ら用意しろ」

とまで仰るわけです。それで剣を持っていて、その剣で耳を切り落とすという話になるのかと思う。こんな最後の晩餐の所で剣を用意するのでしょうか。

³⁶……剣のない者は、服を売ってそれを買いなさい。

そんな余裕はないですよ、時間的に。要するに、今夜は闇の支配だ。今夜は光が失せている。サタンが跋扈する夜だと、そういうことを仰りたかったのでしょう。だから、剣を用意しろ、お金を用意しろ。あなたの方が頼りにしているこの私は犯罪人の一人に数えられてしまっている。それが成就するのだと。

³⁷言っておくが、『その人は犯罪人の一人に数えられた』と書かれていることは、わたしの身に必ず実現する。わたしにかかわることは実現するからである。」

³⁸そこで彼らが、「主よ、剣なら、このとおりここに二振りあります」と言うと、

イエスは、「それでよい」と言われた。

それから、オリブ山で祈られるわけです。その祈りの場面がルカ伝では実に生々しく書いてあります。

⁴³すると、天使が天から現れて、イエスを力づけた。⁴⁴イエスは苦しみもだえ、いよいよ切に祈られた。汗が血の滴るように地面に落ちた。

「滴り落ちる汗は血のごとし」と文語では書いてあります。

⁴⁵イエスが祈り終わって立ち上がり、弟子たちのところに戻って御覧になると、彼らは悲しみの果てに眠り込んでいた。

ルカ伝は優しいですね、

「悲しみの果てに眠り込んでいた」

と。他の福音書ではただ

「眠くて眠っていた。彼らは疲れ果てていたのである」

という記述ですけれども、ここでは「悲しみの果てに眠り込んでいた」という。

⁴⁶イエスは言われた。「なぜ眠っているのか。誘惑に陥らぬよう、起きて祈っているなさい。」

⁴⁷イエスがまだ話しておられると、群衆が現れ、十二人の一人でユダという者が先頭に立って、イエスに接吻をしようと近づいた。

そこからはずうっと同じなんですけれども。そして、

54人々はイエスを捕らえ、引いて行き、大祭司の家に連れて入った。ペトロは遠く離れて従った。55人々が屋敷の中庭の中央に火をたいて、一緒に座っていたので、ペトロも中に混じって腰を下ろした。56するとある女中が、ペトロがたき火に照らされて座っているのを目にして、じつと見つめ、「この人も一緒にいました」と言った。

このあたりは他の福音書とよく似ています。ペテロは三度「知らない、知らない」と言うわけです。その間に「一時間ほどたつと」とありますから、だいたい時間差があります、初めに「知らない」と言ってから最後に「知らない」と言うまでに。

57しかし、ペトロはそれを打ち消して、「わたしはあの人を知らない」と言った。

…… 59一時間ほどたつと、また別の人が、「確かにこの人も一緒にだった。ガリラヤの者だから」と言い張った。60だが、ペトロは、「あなたの言うことは分からない」と言った。まだこう言い終わらないうちに、突然鶏が鳴いた。

61主は振り向いてペトロを見つめられた。

イエスが捕まえられていらつしやる場面と、ペテロが人々から「お前も弟子だろ」と言われている所が距離的に、これだったらかなり近いようですね。イエスは振り向いて、ペテロが否んでいるのが聞こえているわけでしょう。振り向いてじつと見られた。ペテロは「激しく泣いた」と書いてある。

ペトロは、「今日、鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」と言われた主の言葉を思い出した。62そして外に出て、激しく泣いた。

生々しいでしょ、この記述は。だから、「ああ、主のひとみ、まなざしよ」という讚美歌(243)はいい歌ですね。あれがこの場面を想定して作られているわけです。非常にルカ伝のほうは生々しく書いてある感じがいたします。

63さて、見張りをしていた者たちは、イエスを侮辱したり殴ったりした。

64そして目隠しをして、「お前を殴ったのはだれか。言い当ててみる」と尋ねた。

65そのほか、さまざまなことを言ってイエスをののしった。

そして、

66夜が明けると、

となっている。この夜の間、木曜日の晩は全然、ユダヤ人たちによる裁判は開かれていない。捕まる場面では、

「私は神殿の境内で堂々とお話をしている時には捕まえに来ないで、なぜこんな夜に、しかもまるで強盗に向かうようになつこうで来るのか」

と言ってプロテストしておられる。それは他の福音書と共通です。

ところが、マタイ、マルコではその夜に大祭司カヤパを中心とする裁判が行われている。衆議一決、神を冒瀆する者だということで死刑に値すると。そして、翌朝にピラトの所へ



連れて行くということになっていますが、このルカのほうでは、

⁶⁶夜が明けると、民の長老会、祭司長たちや律法学者たちが集まった。そして、イエスを最高法院に連れ出して、

と書いてある。このルカの記述によりますと、衆議所へ連れて行ったということになる。

「⁵⁴人々はイエスを捕らえ、引いて行き、大祭司の家に連れて入った。ペトロは遠く離れて従った。」（ルカ22・54）

とありますから、捕まえたあと、ゲッセマネの園からカヤパの家までぎつと3キロほどありそうです。そのカヤパの家では特別なことはしていない。ただペテロが登場して、「知らない、知らない」と言った。そしてその晩はそれで終わっています。

「見張りの者たちはイエスを侮辱した」

ということは出てきますけれども、裁判は行われていない。夜明けになって初めて裁判が行われますが、それもこのカヤパの家ではなくて、衆議所へ連れて行って、そこで裁判が開かれるというふうにルカではなっています。

このように、ルカはマタイ、マルコとは違うでしょ。私は思いますのに、ルカは歴史家でもあります。非常に詳細に事柄を調べあげて書いている。マルコは口述筆記のようなきらいがあつて、それをベースにしてマタイが作られている。だから、歴史的な記述としてはルカが一番正確なのではないだろうかという気がします、私の推測ですけども。

夜が明けて、正式の衆議所へイエスを連れて行って、そこで彼らの最高法廷が開かれるということになります。だから、この見出しの所でも共同訳では「最高法院で裁判を受ける」と書いてます。最高法院に連れ出して、

⁶⁷「お前がメシアなら、そうだと言うがよい」と言った。イエスは言われた。「わたしは言っても、あなたたちは決して信じないだろう。⁶⁸わたしが尋ねても、決して答えないだろう。⁶⁹しかし、今から後、人の子は全能の神の右に座る。」⁷⁰そこで皆の者が、「では、お前は神の子か」と言うと、イエスは言われた。「わたしはそうだとはい、あなたたちが言っている。」

ここがまた頼りないですね。文語訳のほうで見ますと、

「⁷⁰皆いう『されば汝は神の子なるか』答え給う『なんじらの言うごとく我はそれなり』」

と、はつきりとしている。私はこっちのほうがピンとくるんですよ。

「私がそうだとはいあなたの方が言っていることだ」

なんて、そんな他人事みたいな答えをイエスがなさることはないだろうと思うんですね、この期に及んで。

⁷¹人々は、「これでもまだ証言が必要だろうか。我々は本人の口から聞いたのだ」と言った。



「雲に乗って現れる」とか、そんなことはここに出てこないでしょ。「全能者の右に座る」ということは出てきますけれども、その程度であって、

「私はそうだ。神の子だ」

ということをはつきり仰った。それで、

「人でありながら、自分を神と等しい者にする。これは怪しからん」

と、これはヨハネ伝にもしばしば出てきます。

「父と我とは一つなり。これを彼らは死に値するとした」

と出てきますから。ルカでも文語訳では、「私はそうだ」と書いてある。それが共同訳では、

⁷⁰そこで皆の者が、「では、お前は神の子か」と言うと、イエスは言われた。「わ

たしがそうだと、あなたたちが言っている。」⁷¹人々は、「これでもまだ証言

が必要だろうか。我々は本人の口から聞いたのだ」と言った。（ルカ22・31）

⁷¹

何も本人の口から聞いてないではないですか。

「私がそうだとあなた方が言っている」

という伝聞証拠ではないですか。こういうところを、聖書学者とか翻訳する人は何も思わないでやっているのじゃないかね。やはり、最高法院で集まって、これはこれでいいのだろうかと必死にやっているのだと、私なんかは思うけれども。

「そこで、全会衆が立ち上がり、イエスをピラトのもとに連れて行った。」（ル

カ23・1）

と。ですから、夜の場面だつて、ルカ伝は夜は、群衆は叩いたり侮辱したりしてますけれども、祭司長や祭司たちは何もそこでは会を開いていない。朝になって初めて、しかも衆議所、最高法院まで連れて行って、そこで正式な裁判をやつて、それからピラトへ送る。どっちにしてもピラトへ送られる。送られる前にどういうプロセスで送られたかということは今ちょっと見たわけです。

●その前夜の情況（ヨハネ18章）

ヨハネでは、その前夜の情況はどうなっているか。これは木曜日の晩です。金曜日の朝にピラトの所へ連れて行かれて、そこで裁判を受けて、十字架ということになりますから。ヨハネほうを見ますと、18章です。その前までは、大祭司の祈り、最後のお祈りが17章に出てきます。

「こう話し終わると、イエスは弟子たちと一緒に、キドロン谷の向こうへ出て行かれた。そこには園があり、イエスは弟子たちとその中に入られた。

²イエスを裏切ろうとしていたユダも、その場所を知っていた。イエスは、弟子たちと共に度々ここに集まっておられたからである。



だから、これはどうもゲッセマネの園だろうと思う。名前は出てきませんが、ヨハネ伝では、他の福音書が伝えるゲッセマネの園での、血の汗を流して祈られた祈り、もだえて苦しんで祈られた祈り、それが全く出てこない。では、どこにそのゲッセマネがヨハネ伝ではあるかという、12章なんです。「一粒の麦、地に落ちて死なずば」という、あの場面になってくる。12章23節から、

「²³イエスはこうお答えになった。「人の子が栄光を受ける時が来た。²⁴はつきり言っておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。²⁵自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る。²⁶わたしに仕えようとする者は、わたしに従え。そうすれば、わたしのいるところに、わたしに仕える者もいることになる。わたしに仕える者がいれば、父はその人を大切にしてください。」²⁷「今、わたしは心騒ぐ。何と言おうか。『父よ、わたしをこの時から救ってください』と言おうか。』しかし、わたしはまさにこの時のために来たのだ。²⁸父よ、御名の栄光を現してください。」すると、天から声が聞こえた。「わたしは既に栄光を現した。再び栄光を現そう。」²⁹そばにいた群衆は、これを聞いて、「雷が鳴った」と言い、ほかの者たちは「天使がこの人に話しかけたのだ」と言った。³⁰イエスは答えて言われた。「この声が聞こえたのは、わたしのためではなく、あなたがたのためだ。³¹今こそ、この世が裁かれる時。今、この世の支配者が追放される。³²わたしは地上から上げられるとき、すべての人を自分のもとへ引き寄せよう。」³³イエスは、御自分がどのような死を遂げるかを示そうとして、こう言われたのである。」（ヨハネ12・23～33）

これが他の福音書のゲッセマネに相当する場面だと思われまます。

さきほどの捕らわれの場面のほうへ戻りますと、18章です。ケデロンの谷の向こうへ行つて、そこへユダがやって来た。そのユダに引き連れられて来た連中の姿がヨハネ伝では、

³それでユダは、一隊の兵士と、祭司長たちやファリサイ派の人々の遣わした下役たちを引き連れて、そこにやって来た。

ここに「一隊の兵士」というのが出てくる。他の福音書では全然「兵士」は出ておりませんでしたが、ヨハネのほうでは「兵士」が出てきます。フランススコ会訳の註に「よりまずと、

「一隊の兵士」と訳されているギリシア語は、完全編成のときは600人、最小限度の場合は200人の兵士からなるローマ軍の部隊を指す。共観福音書は、ローマ軍の兵士がイエスを逮捕に参加したかどうかを明記していない。」

とあります。



松明^{たいまつ}やともし火や武器を手^てにしていた。⁴ イエスは御自分の身に起こることを何もかも知^しておられ、進み出て、「だれを捜しているのか」と言われた。⁵ 彼らが「ナザレのイエスだ」と答えると、イエスは「わたしである」と言われた。イエスを裏切ろうとしていたユダも彼らと一緒にいた。

これはヨハネにしか出てこない。「ユダが接吻した」なんてことはここでは出てきません。「ユダも一緒にいた」とだけ書いてある。

⁶ イエスが「わたしである」と言われたとき、彼らは後ずさりして、地に倒れた。

これはやはりイエスというお方の権威でしょうね。自分から名乗って一步前へ進まれると、彼らはそこで倒れたという。

⁷ そこで、イエスが「だれを捜しているのか」と重ねてお尋ねになると、彼らは「ナザレのイエスだ」と言^いった。すると、イエスは言^いわれた。『わたしである』と言^いったではないか。わたしを捜しているのなら、この人々は去らせなさい。』

つまり、私を捕まえるのは結構だけれども、弟子たちには指一本も触れないでくれというお気持ちです。

⁹ それは、「あなたが与えてくださった人を、わたしは一人も失い^ませませんでした」と言^いわれたイエスの言葉が実現するためであ^った。

この言葉は、最後の¹⁰大祭司の祈りの中に出てきますのと、それから6章の、

「私は私の所へ来る者を拒^きまない。その人を終りの時に甦^{よみがえ}らせる。一人も失^うことなく」

という言葉が出てきます。この二つの言葉を指しているだろうと思います。「わたしは一人も失い^ませませんでした」という過去形で書かれると、あの大祭司の祈りの中で、「こうでした」と祈^{いの}っておられるから、そこを直接指^さすことにな^りますが。

¹⁰ シモン・ペトロは剣を持^もっていたので、それを抜いて大祭司の手下に打^うてかかり、その右の耳を切り落^おとした。手下の名はマルコスであ^った。¹¹ イエスはペトロに言^いわれた。「剣をさやに納^いめなさい。父がお与えにな^った杯は、飲^のむべきではないか。」

他の福音書では、「耳に手を当^あてて癒^いされた」とありますけれども、ここではその「癒^いされた」という部分^{ぶん}は出てきません。

¹² そこで一隊の兵士と千人隊長、およびユダヤ人の下役^{しもべ}たちは、イエスを捕^とらえて縛^ばり、¹³ まず、アンナスのところへ連れて行^いった。彼が、その年の大祭司カイアフアのしゅうとだ^っったからである。¹⁴ 一人の人間が民の代わり^{しろ}に死ぬ方が好都合だと、ユダヤ人たちに助言^{すけいご}したのは、このカイアフアであ^った。



った。

ヨハネ伝の始めのほうに出てきます。ここでヨハネ伝だけ「アンナス」という前の大祭司が登場するわけです。それから今度はまたペテロの場面です。

¹⁵ シモン・ペトロともう一人の弟子は、イエスに従った。この弟子は大祭司の知り合いだったので、イエスと一緒に大祭司の屋敷の中庭に入ったが、
¹⁶ ペトロは門の外に立っていた。

知り合いだから入れるけれども、知り合いでないペテロは門の外にいた。みだりにそう簡単にに入れるものではないということからすると、これは納得できる事実なんです。

大祭司の知り合いである、そのもう一人の弟子は、出て来て門番の女に話し、ペトロを中に入れた。¹⁷ 門番の女中はペトロに言った。「あなたも、あの人の弟子の一人ではありませんか。」ペトロは、「違う」と言った。¹⁸ 僕や下役たちは、寒かったので炭火をおこし、そこに立って火にあたっていた。ペトロも彼らと一緒に立って、火にあたっていた。

そこで大祭司アンナスの所へ連れて行つたわけです。

¹⁹ 大祭司はイエスに弟子のことや教えについて尋ねた。²⁰ イエスは答えられた。「わたしは、世に向かって公然と話した。わたしはいつも、ユダヤ人が皆集まる会堂や神殿の境内で教えた。ひそかに話したことは何もない。²¹ なぜ、わたしを尋問するのか。わたしが何を話したかは、それを聞いた人々に尋ねるがよい。その人々がわたしの話したことを知っている。」²² イエスがこう言われると、そばにいた下役の一人が、「大祭司に向かって、そんな返事のしかたがあるか」と言つて、イエスを平手で打った。²³ イエスは答えられた。「何か悪いことをわたしが言つたのなら、その悪いところを証明しなさい。正しいことを言つたのなら、なぜわたしを打つのか。」²⁴ アンナスは、イエスを縛つたまま、大祭司カイアフアのもとに送った。

アンナスはこれだけのことをやってすぐカヤパの所へ送った。アンナスとカヤパが同じ所に住んでいるのか、別の所に住んでいるのか、わからない。「カヤパの家」とありますから、家の近くにアンナスが居つたのか、そのへんは全く私はわかりません。そしてまた、ペテロが出てくる。

²⁵ シモン・ペトロは立って火にあたっていた。人々が、「お前もあの男の弟子の一人ではないのか」と言うのと、ペトロは打ち消して、「違う」と言つた。
²⁶ 大祭司の僕の一人で、ペトロに片方の耳を切り落とされた人の身内の者が言つた。「園であの男と一緒にいるのを、わたしに見られたではないか。」²⁷ ペトロは、再び打ち消した。するとすぐ、鶏が鳴いた。

²⁸ 人々は、イエスをカイアフアのところから総督官邸に連れて行つた。明



け方であつた。

ちようどルカ伝もそうでした。ルカ伝でも、カヤパのもとで裁判をやつてません。翌朝になつて裁判をやつた。それからピラトへ連れて行つた。それがルカ伝でした。今度はヨハネのほうは全然、裁判らしきことは何も起こらないで、

28人々は、イエスをカイアファのところから総督官邸に連れて行つた。明け方であつた。」（ヨハネ18・1～28）

という記事です。ここでやつとピラトに辿りつくわけです。ピラトの前での出来事が私は一番大事だと思います。それまでのことはいわばユダヤ人の内部問題なんです。何とかイエスをやつつけようと。やつつけないけれども、自分たちには権限がない。死刑にできない。だから、ピラトに願ひ出るしかない。ところが、ずうつとご覧になるとわかりますように、ピラトはいくら調べても、イエスはそのような罪人とは思えない。何とかして釈放したい。しかし、ユダヤ人たちは「絶対それはノーだ」と言う。そういうユダヤ人たちとピラトとのせめぎ合いがこれから起こります。

●総督ピラトの前で（マタイ27章）

それで、順序を追つて、ピラトの前でどういうことになるかというのを、またマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネでちよつと辿つてみたいと思います。

まず、マタイの27章です。

「1夜が明けると、祭司長たちと民の長老たち一同は、イエスを殺そうと相談した。2そして、イエスを縛つて引いて行き、総督ピラトに渡した。……

11さて、イエスは総督の前に立たれた。総督がイエスに、「お前がユダヤ人の王なのか」と尋問すると、イエスは、「それは、あなたが言っていることです」と言われた。」

文語訳では、

「11さてイエス、総督の前に立ち給ひしに、総督問いて言う『なんじはユダヤ人の王なるか』イエス言ひ給う『なんじの言うが如し』」

とはつきり、「お前の言う通り、そうだ」となっている。ところが、この共同訳のほうでは、「総督がイエスに、「お前がユダヤ人の王なのか」と尋問すると、イエスは、「それは、あなたが言っていることです」と言われた。」と。

「私の知つたことではない。お前さんがそう勝手に言っているだけだ」という他人事に聞こえますね。

12祭司長たちや長老たちから訴えられている間、これには何もお答えにならなかつた。13するとピラトは、「あのようにお前に不利な証言をしているのに、



聞こえないのか」と言った。¹⁴それでも、どんな訴えにもお答えにならなかつたので、総督は非常に不思議に思った。

それは冤罪^{えんざい}でしたら、みな必死になつて「それは違う」という弁明をするはずなのに、ピラトの前に一言もお答えにならない。何を言われても、平然としておられる。そこでピラトは実に不思議な思いをした。

¹⁵ところで、祭りの度ごとに、総督は民衆の希望する囚人を一人釈放することにしていた。¹⁶そのころ、バラバ・イエスという評判の囚人がいた。¹⁷ピラトは、人々が集まつて来たときに言った。「どちらを釈放してほしいのか。バラバ・イエスか。それともメシアといわれるイエスか。」

もちろん、ピラトはイエスのほうを釈放したいけれども。

¹⁸人々がイエスを引き渡したのは、ねたみのためだと分かっていたからである。¹⁹一方、ピラトが裁判の席に着いているときに、妻から伝言があつた。「あの正しい人に関係しないでください。その人のことで、わたしは昨夜、夢で随分苦しめられました。」²⁰しかし、祭司長たちや長老たちは、バラバを釈放して、イエスを死刑に処してもらうようにと群衆を説得した。²¹そこで、総督が、「二人のうち、どちらを釈放してほしいのか」と言うと、人々は、「バラバを」と言った。²²ピラトが、「では、メシアといわれているイエスの方は、どうしたらよいか」と言うと、皆は、「十字架につけろ」と言った。²³ピラトは、「いったいどんな悪事を働いたというのか」と言ったが、群衆はますます激しく、「十字架につけろ」と叫び続けた。²⁴ピラトは、それ以上言っても無駄なばかりか、かえつて騒動が起こりそうなを見て、水を持って来させ、群衆の前で手を洗つて言った。「この人の血について、わたしには責任がない。お前たちの問題だ。」²⁵民はこぞつて答えた。「その血の責任は、我々と子孫にある。」²⁶そこで、ピラトはバラバを釈放し、イエスを鞭打ってから、十字架につけるために引き渡した。

²⁷それから、総督の兵士たちは、イエスを総督官邸に連れて行き、部隊の全員をイエスの周りに集めた。

27章11節に、

「11さて、イエスは総督の前に立たれた。」

とあります。その「総督の前」というのは、官邸ではないのでしょうか。官邸でない総督の前というのがここに出てきます。総督は、「バラバとどちらか？」と尋ねています。「バラバを助けろ、イエスは十字架だ」と言うものですから、

²⁶そこで、ピラトはバラバを釈放し、イエスを鞭打ってから、十字架につけるために引き渡した。



と。すぐ十字架への道を歩かれるのかと思うとまた、

²⁷それから、総督の兵士たちは、イエスを総督官邸に連れて行き、部隊の全員をイエスの周りに集めた。²⁸そして、イエスの着ている物をはぎ取り、赤い外套を着せ、²⁹茨で冠を編んで頭に載せ、また、右手に葦の棒を持たせて、その前にひざまずき、「ユダヤ人の王、万歳」と言つて、侮辱した。

ここからは、兵士たちが非常にイエスを侮辱する場面がずっと出てきているわけです。³⁰また、唾を吐きかけ、葦の棒を取り上げて頭をたたき続けた。³¹このようにイエスを侮辱したあげく、外套を脱がせて元の服を着せ、十字架につけるために引いて行つた。

³²兵士たちは出て行くと、シモンという名前のキレネ人に出会つたので、イエスの十字架を無理に担がせた。³³そして、ゴルゴタという所、すなわち「されこうべの場所」に着くと、³⁴苦いものを混ぜたぶどう酒を飲ませようとしたが、イエスはなめただけで、飲もうとされなかった。³⁵彼らはイエスを十字架につけると、くじを引いてその服を分け合い、³⁶そこに座つて見張りをしていた。³⁷イエスの頭の上には、「これはユダヤ人の王イエスである」と書いた罪状書きを掲げた。³⁸折から、イエスと一緒に二人の強盗が、一人は右にもう一人は左に、十字架につけられていた。³⁹そこを通りかかった人々は、頭を振りながらイエスをののしつて、⁴⁰言つた。「神殿を打ち倒し、三日で建てる者、神の子なら、自分を救つてみる。そして十字架から降りて来い。」⁴¹同じように、祭司長たちも律法学者たちや長老たちと一緒に、イエスを侮辱して言つた。⁴²「他人は救つたのに、自分は救えない。イスラエルの王だ。今すぐ十字架から降りるがいい。そうすれば、信じてやろう。」⁴³神に頼っているが、神の御心ならば、今すぐ救ってもらえ。『わたしは神の子だ』と言つていたのだから。」⁴⁴一緒に十字架につけられた強盗たちも、同じようにイエスをののしつた。

ここに何時頃に十字架に付けたかということとは出ておりませんが、おそらく9時頃ではないかと思われます。その次に、

⁴⁵さて、昼の十二時に、全地は暗くなり、」（マタイ27：1～45）

と、こうなっています。ピラトの前ではこの程度のことか、マタイ伝では書かれています。マルコ伝はマタイ伝とほぼ一緒ですので、これは時間の関係で省略します。またあとでご覧ください。

●衆議所で裁判（ルカ23章）

今度は、ルカのほうではどうなっているか。ルカはかなり違ってくる。そもそもヘロデ



王が出てくる。マタイ、マルコではヘロデ王なんては全然出てこないけれども、それが出てきます。さきほどは22章66節を読みました。明け方に集まって、最高法院、衆議所へ連れて行って裁判をした。そして、23章へ移ります。

「¹そこで、全会衆が立ち上がり、イエスをピラトのもとに連れて行つた。
²そして、イエスをこう訴え始めた。「この男はわが民族を惑わし、皇帝に税を納めるのを禁じ、また、自分が王たるメシアだと言っていることが分かりました。」

三つの罪状をあげたんです、ここでは。つまり一つは、

「民族を惑わしている」

ということ、これが第一の訴因です。第二番目は、

「皇帝への税金を納めるのを禁止している。納税はしなくていい。納税してはいか
んと言ってる」

と。これはローマ皇帝に対する背きになります。それから三つ目は、

「自分が王様である。ローマ皇帝が居るのに自分が王様だと言っている。これは怪
しからんではないか、これはローマに対する叛逆ではないか」

ということ、この三つです。

「民を惑わしている。放っておけば騒動になるかもしれませんよ」

という含みがあるのでしょうか。それから、「税金を納めてはいかんと言っている」。それから、「自分が王だと言っている」と、この三つの罪状を並べ立てた。

³そこで、ピラトがイエスに、「お前がユダヤ人の王なのか」と尋問すると、

イエスは、「それは、あなたが言っていることです」とお答えになった。

ここに出てきましたね、「それはあなたが言っていることです」と。フランススコ会訳もそうなっている。文語訳では、

「³ピラト、イエスに問いて言う『なんじはユダヤ人の王なるか』答えて言い
給う『なんじの言うが如し』」

「その通りだよ」と。やっぱりこつちのほうが私は好きです、好き嫌いの問題ではないかもしれませんけれども。「それはあなたが言っていることです」なんていうより、「その通りだ、王だ」と。ヨハネ伝でも「王だ」と言っている。しかし、

「ただし、私の国はこの世のものではない。私の国は真理の王国なんだ」

「では、真理とは何だ？」

と、そこで問答が終わることになっています。ですから、そこへつながっていくんですが、このルカのほうでは、

³そこで、ピラトがイエスに、「お前がユダヤ人の王なのか」と尋問すると、
イエスは、「それは、あなたが言っていることです」とお答えになった。



4. ピラトは祭司長たちと群衆に、「わたしはこの男に何の罪も見いだせない」と言った。

こうなれば、「私が王だ」と仰らないで、

「それはあなたが言っていることで、私には関係ない」

「そうか、それならお前は罪がない」

と。これはこれでまた論理的につながる。でも、ピラトは簡単ですね、三つの罪状を訴えられているのに、

「お前は王か？」

「いや、それはあんたが言っていることだよ」

「あつ、そうか。そんならいいわ。私はこの男に何の罪も見出せない」

と。こんな簡単な尋問で罪状認否ができるんでしょうか。非常に簡単です。

5. しかし彼らは、「この男は、ガリラヤから始めてこの都に至るまで、

つまり、北から南に至るまで、イスラエル全土と言つてもいいわけです。

ユダヤ全土で教えながら、民衆を扇動しているのです」と言い張った。

放つておいたら、えらいことになりますよと言った。

6. これを聞いたピラトは、この人はガリラヤ人かと尋ね、⁷ヘロデの支配下にあることを知ると、イエスをヘロデのもとに送った。ヘロデも当時、エルサレムに滞在していたのである。⁸彼はイエスを見ると、非常に喜んだ。というのは、イエスのうわさを聞いて、ずっと以前から会いたいと思つていたし、

「これは魔術師だ、何か自分の目の前で奇蹟をやってくれるなら見てやろう」

と、これがヘロデの魂胆なんです。それで、会いたいと言っているわけです。

イエスが何かしるしを行うのを見たいと望んでいたからである。⁹それで、いろいろと尋問したが、イエスは何もお答えにならなかった。¹⁰祭司長たちと律法学者たちはそこにいて、イエスを激しく訴えた。¹¹ヘロデも自分の兵士たちと一緒にイエスをあざけり、侮辱したあげく、派手な衣を着せてピラトに送り返した。¹²この日、ヘロデとピラトは仲がよくなった。それまでは互いに敵対していたのである。

おもしろいですね。共通の敵が現れたというので、仲良くなった。

13. ピラトは、祭司長たちと議員たちと民衆とを呼び集めて、¹⁴言った。「あなたたちは、この男を民衆を惑わす者としてわたしのところに連れて来た。わたしはあなたがたの前で取り調べたが、訴えているような犯罪はこの男には何も見つからなかった。¹⁵ヘロデとても同じであった。それで、我々のもとに送り返してきたのだが、この男は死刑に当たるようなことは何もしていない。¹⁶だから、鞭で懲らしめて釈放しよう。」



余計なことですよ、鞭で懲らしめるなんて。無罪の人間をなんで鞭で懲らしめるんですか。

17†18しかし、人々は一斉に、「その男を殺せ。バラバを釈放しろ」と叫んだ。

19このバラバは、都に起こった暴動と殺人のかどで投獄されていたのである。

20ピラトはイエスを釈放しようと思つて、改めて呼びかけた。21しかし人々は、

「十字架につける、十字架につける」と叫び続けた。22ピラトは三度目に言った。

「いったい、どんな悪事を働いたと言うのか。この男には死刑に当たる犯罪

は何も見つからなかった。だから、鞭で懲らしめて釈放しよう。」23とこ

ろが人々は、イエスを十字架につけるようにあくまでも大声で要求し続けた。

その声はますます強くなった。24そこで、ピラトは彼らの要求をいれる決定

を下した。25そして、暴動と殺人のかどで投獄されていたバラバを要求どお

りに釈放し、イエスの方は彼らに引き渡して、好きなようにさせた。（ルカ

23・1～25）

総督ピラトも一応頑張ったことは頑張ったけれども、このまま放っておけば、暴動が起こつてしまう。暴動が起これば、ローマ皇帝から

「お前は治安維持の責任を果していないではないか」

ということ、自分の地位が危なくなる。だから、それに代えられない。

「しょうがない。さあ、お前たち勝手にしろ」

と、責任放棄だと私は思う。ローマの総督なんてその程度の頼りない人間なのかと、まあ偉そうに思うけれども。そういう情況なんです。

ですから、今まで福音書を見てきましたら、全部、これはユダヤ人たちが必死になって、イエスを十字架につけると。ピラトは、マタイ伝によりましても、このルカ伝によりましても、とにかく——マタイ伝のほうがはつきりしてますね、奥さんがうなされているんですから、「あの人には関わりをもたないで」と——ピラトは手を洗つて、

「私はこの人に何の罪も見出せない。この責任は誰がとるか」

と言うと、ユダヤ人は

「私たちと私たちの子孫がとるから」

と、はつきりマタイ伝では言ってます。それがそのあとのユダヤ人の運命になっていくわけです。70年には滅びます。そして流浪の民になります。マルコのほうでも、ピラトは必死になって助けようとしたけれども、とうとう屈伏してしまうことになる。

●総督官邸で（ヨハネ18章）

それからその次に、ヨハネはどう見ているかをみます。18章28節から、

「28人々は、イエスをカイアファのところから総督官邸に連れて行った。明け方であった。」



「明け方であった」と書いてあります。彼らは特に議会を開いたりとかしてない。このヨハネによりますと、直ぐにピラトの所へ連れて行つた。もちろん、彼らがイエスを捕えに来たというのは、はっきりそういう意図でやっているんですから、何もそこで議会を開いたりとか、尋問したりとか、要らないわけでしょうね。だから、ヨハネ伝ではそれが全部省略されていると見ておきましょう。

しかし、彼らは自分では官邸に入らなかった。

ピラトは総督としてこの地方を治めていますけれども——一応ヘロデという王様が治めているけれども——それを更にその上位で治めているのがピラトです。しかし彼は異邦人だから、その官邸に入るとするのは、自分たちが汚れるから入りたくない。ユダヤ人の誇りが許さない。そこで、ピラトのほうから出向いてくる。出張サービスをしているわけです、ピラトは。

汚れないで過越の食事をするためである。²⁹そこで、ピラトが彼らのところへ出て来て、「どういう罪でこの男を訴えるのか」と言った。³⁰彼らは答えて、「この男が悪いことをしていなかったら、あなたに引き渡しはしなかったでしょう」と言った。³¹ピラトが、「あなたたちが引き取って、自分たちの律法に従って裁け」と言うと、ユダヤ人たちは、「わたしたちには、人を死刑にする権限がありません」と言った。³²それは、御自分がどのような死を遂げるかを示そうとして、イエスの言われた言葉が実現するためであった。³³そこで、ピラトはもう一度官邸に入り、イエス呼び出して、

この時、イエスは縛られていない。あとになって縛られますけれども、この時は縛られていません、官邸内では。

「お前がユダヤ人の王なのか」と言った。³⁴イエスはお答えになった。「あなたは自分の考えで、そう言うのですか。それとも、ほかの者がわたしについて、あなたにそう言ったのですか。」³⁵ピラトは言い返した。「わたしはユダヤ人なのか。お前の同胞や祭司長たちが、お前をわたしに引き渡したのだ。いったい何をしたのか。」³⁶イエスはお答えになった。「わたしの国は、この世には属していない。もし、わたしの国がこの世に属していれば、わたしがユダヤ人に引き渡されないように、部下が戦ったことだろう。しかし、実際、わたしの国はこの世には属していない。」

「わたしの国はこの世のものではない」と、これはとても大事なところなんです。文語訳ではどうなっているかを見ますと、

「³⁶イエス答へ給う『わが国はこの世のものならず、若し我が国この世のものならば、我が僕ら我をユダヤ人に付きじと戦いしならん。然れど我が国は此の世よりのものならず』³⁷ここにピラト言う『されば汝は王なるか』イエス



答え給う『われの王たることは汝の言えるごとし。我は之がために生れ、之がために世に来れり、即ち真理につきて証せん為なり。凡て真理に属する者は我が声をきく』³⁶。ピラト言う『真理とは何ぞ』（ヨハネ18・36～38文語訳）
とここで問答が終わっています。共同訳のほうではどうなっているか見ましよう。

「³⁶イエスはお答えになった。『わたしの国は、この世には属していない。もし、わたしの国がこの世に属していれば、わたしがユダヤ人に引き渡されないように、部下が戦ったことだろう。しかし、実際、わたしの国はこの世には属していない。』」³⁷そこでピラトが、「それでは、やはり王なのか」と言う、イエスはお答えになった。「わたしが王だとは、あなたが言っていることです。ここもちよつと頼りない。『お前が言う通り私は王だ。しかし、この世の王ではない。真理を証明する真理の世界の王だ』と、これがイエスのお心ですね。

わたしは真理について証しをするために生まれ、そのためにこの世に来た。真理に属する人は皆、わたしの声を聞く。」³⁸ピラトは言った。「真理とは何か。」ピラトは、こう言ってからもう一度、ユダヤ人たちの前に出て来て言った。

イエスのことを聞いてみても、どうも話が合わない。王は王でも、この世の世界の王様ではない。神秘の世界、天国の王様だと。ピラトにとつてはこの世のことしかないわけです。そんな別世界があるとは思っていませんから、こういう話は合わない。ちよつと管轄違いだと思つて、また出てきて、ユダヤ人たちに問いかける。

もう一度、ユダヤ人たちの前に出て来て言った。「わたしはあの男に何の罪も見いだせない。³⁹ところで、過越祭にはだれか一人をあなたたちに釈放するのが慣例になっている。あのユダヤ人の王を釈放してほしいか。」⁴⁰すると、彼らは、「その男ではない。バラバを」と大声で言い返した。バラバは強盗であつた。」（ヨハネ18・28～40）

これでイエスは正式にピラトによつても捕縛される格好になります。それからピラトの裁判が行われます。19章。

「そこで、ピラトはイエスを捕らえ、鞭で打たせた。²兵士たちは茨で冠を編んでイエスの頭に載せ、紫の服をまとわせ、³そばにやって来ては、「ユダヤ人の王、万歳」と言つて、平手で打った。⁴ピラトはまた出て来て、言った。「見よ、あの男をあなたたちのところへ引き出そう。そうすれば、わたしが彼に何の罪も見いだせないわけが分かるだろう。」⁵イエスは茨の冠をかぶり、紫の服を着けて出て来られた。ピラトは、「見よ、この男だ」と言った。

「見よ、この男だ」、「この人を見よ」と。だから、ピラトはイエスの前に心では屈伏しているわけです。王様であつてもこの世の王様ではない。別次元の真理の世界の王様だと。しかも、自分に不利なことを言われても、平然として何もお答えにならない。



「これはちよつとわしの手におえるお方ではない。何とか釈放したい」と、こういうことではないだろうかと思う。だから、「見よ、この人だ。あなたたちは、無実だということがわかるだろう」と言った。

⁶祭司長たちや下役たちは、イエスを見ると、「十字架につける」と叫んだ。ピラトは言った。「あなたが引き取って、十字架につけるがよい。わたしはこの男に罪を見いだせない。」⁷ユダヤ人たちは答えた。「わたしたちには律法があります。律法によれば、この男は死罪に当たります。神の子と自称したからです。」

⁸ピラトは、この言葉を聞いてますます恐れ、⁹再び総督官邸の中に入って、これはどういうことなんでしょうかね。この19章の始めは、「ピラトはイエスを捕らえ、鞭で打たせた」。そして、「ユダヤ人の王、万歳」なんてやっているでしょ。そして、⁹再び総督官邸の中に入って、「お前はどこから来たのか」とイエスに言った。またイエスを連れて帰ったんでしょうかね。イエスが中に居られるのならわかるんですけども。一端縛りあげて、こんなことをやって、それからまた、

⁹再び総督官邸の中に入って、「お前はどこから来たのか」とイエスに言った。しかし、イエスは答えようとされなかった。¹⁰そこで、ピラトは言った。「わたしに答えないのか。お前を釈放する権限も、十字架につける権限も、このわたしにあることを知らないのか。」

今度はピラトは脅しに出た。

¹¹イエスは答えられた。「神から与えられていなければ、わたしに対して何の権限もないはずだ。だから、わたしをあなたに引き渡した者の罪はもつと重い。」¹²そこで、ピラトはイエスを釈放しようと努めた。しかし、ユダヤ人たちは叫んだ。「もし、この男を釈放するなら、あなたは皇帝の友ではない。王と自称する者は皆、皇帝に背いています。」

こんな問答がありました。それから、正式裁判がこれからなんです。

¹³ピラトは、これらの言葉を聞くと、イエスを外に連れ出し、ヘブライ語でガバタ、すなわち「敷石」という場所で、裁判の席に着かせた。

ここからが正式な裁判です。それまではいわば準備手続きでしょうか、なにか尋問手続きをやっているような感じです。

¹⁴それは過越祭の準備の日の、正午ごろであった。

他の福音書では、9時頃に十字架につけて、それが12時になって「正午ごろ」で、真っ暗になって3時に及んだ。3時に息を引きとられた。こういうように9時頃から始まっているけれども、このヨハネ伝では、ピラトの所に連れてきたのが「夜明け方」でしょ。それからこういういろんな問答がありまして、裁判の席についたのが金曜日の「正午ごろ」で



あったと。ちょっとこれは遅すぎるのではないかと思いますけれども。

ピラトがユダヤ人たちに、「見よ、あなたたちの王だ」と言う¹⁵。彼らは叫んだ。「殺せ。殺せ。十字架につけろ。」ピラトが、「あなたたちの王をわたしは十字架につけるのか」と言うと、祭司長たちは、「わたしたちには、皇帝のほかに王はありません」と答えた。¹⁶そこで、ピラトは、十字架につけるために、イエスを彼らに引き渡した。

こうして、彼らはイエスを引き取った。（ヨハネ19・1～16）

●十字架の道

ここから十字架の道を歩かれる場面が出てくる。マタイ、マルコ、ルカでは、「クレネ人シモン」というのが出てきて、それが十字架を担ぐお手伝いをする。イエスは相当疲れてヨロヨロしておられたんでしょね。クレネ人シモンに十字架を負わせて、あのゴルゴタの丘にたどり着くことになっていますが、ヨハネでは、イエスが全部負われることになっています。

「¹⁷イエスは、自ら十字架を背負い、いわゆる「されこうべの場所」、すなわちヘブライ語でゴルゴタという所へ向かわれた。¹⁸そこで、彼らはイエスを十字架につけた。また、イエスと一緒にほかの二人をも、イエスを真ん中にして両側に、十字架につけた。¹⁹ピラトは罪状書きを書いて、十字架の上に掛けた。それには、「ナザレのイエス、ユダヤ人の王」と書いてあった。²⁰イエスが十字架につけられた場所は都に近かったので、多くのユダヤ人がその罪状書きを読んだ。それは、ヘブライ語、ラテン語、ギリシア語で書かれていた。²¹ユダヤ人の祭司長たちがピラトに、『ユダヤ人の王』と書かず、『この男は「ユダヤ人の王」と自称した』と書いてください」と言った。²²しかし、ピラトは、「わたしが書いたものは、書いたままにしておけ」と答えた。

²³兵士たちは、イエスを十字架につけてから、その服を取り、四つに分け、各自に一つずつ渡るようにした。下着も取ってみたが、それには縫い目がなく、上から下まで一枚織りであった。²⁴そこで、「これは裂かないで、だれのものになるか、くじ引きで決めよう」と話し合った。それは、「彼らはわたしの服を分け合い、わたしの衣服のことでくじを引いた」という聖書の言葉が実現するためであった。兵士たちはこのとおりにしたのである。²⁵イエスの十字架のそばには、その母と母の姉妹、クロパの妻マリアとマグダラのマリアとが立っていた。²⁶イエスは、母とそばにいる愛する弟子（ヨハネ）とを見て、母に、「婦人よ、御覧なさい。あなたの子です」と言われた。²⁷それから弟子に言われた。「見なさい。あなたの母です。」そのときから、この弟



子はイエスの母を自分の家に引き取った。」（ヨハネ19・17～27）
これが十字架の場面です。ゴルゴタの丘へと向かって行かれて十字架についた。

マタイ、マルコのほうでその十字架の場面をたどってみますと、マタイでは27章32節、
「³²兵士たちは出て行くと、シモンという名前のキレネ人に出会ったので、イエスの十字架を無理に担がせた。³³そして、ゴルゴタという所、すなわち「されこうべの場所」に着くと、³⁴苦いものを混ぜたぶどう酒を飲ませようとしたが、イエスはなめただけで、飲もうとされなかった。³⁵彼らはイエスを十字架につけると、くじを引いてその服を分け合い、³⁶そこに座って見張りをしていた。³⁷イエスの頭の上には、「これはユダヤ人の王イエスである」と書いた罪状書きを掲げた。³⁸折から、イエスと一緒に二人の強盗が、一人は右にもう一人は左に、十字架につけられていた。³⁹そこを通りかかった人々は、頭を振りながらイエスをののしって、⁴⁰言った。「神殿を打ち倒し、三日で建てる者、神の子なら、自分を救ってみろ。そして十字架から降りて来い。」
⁴¹同じように、祭司長たちも律法学者たちや長老たちと一緒に、イエスを侮辱して言った。……⁴⁴一緒に十字架につけられた強盗たちも、同じようにイエスをののしった。」（マタイ27・32～44）

ここでは、ルカ伝と全く違いますね。この二人は同じです。ところが、ルカ伝では一方は悔い改める。

そのところをマルコはどう言ってみようか。マルコは15章21節、ここにクレネ人シモンが十字架を担いで行く。それから、

「没薬を混ぜたぶどう酒を飲ませようとしたがイエスはお受けにならなかった」

ということが出てきて、

「イエスをみんながののしりあった」

ということが出てきて、一番最後のところに、

「³²メシア、イスラエルの王、今すぐ十字架から降りるがいい。それを見たら、信じてやろう。」一緒に十字架につけられた者たちも、イエスをののしった。

と。それから、

³³昼の十二時になると、全地は暗くなり、それが三時まで続いた。」（マルコ15・32～33）

となっています。

それから、ルカのほうが、この盗賊の一方は悔い改めるといふ麗しい場面が出てきている。しかも、イエスがゴルゴタへ向かう途中でイスラエルの人たちのことを嘆いて仰っていることが出てきます。これはルカ伝にだけ出てきます。ルカ23章26節、

「²⁶人々はイエスを引いて行く途中、田舎から出て来たシモンというキレネ人



を捕まえて、十字架を背負わせ、イエスの後ろから運ばせた。²⁷民衆と嘆き悲しむ婦人たちが大きな群れを成して、イエスに従った。²⁸イエスは婦人たちの方を振り向いて言われた。「エルサレムの娘たち、わたしのために泣くな。むしろ、自分と自分の子供たちのために泣け。²⁹人々が、『子を産めない女、産んだことのない胎、乳を飲ませたことのない乳房は幸いだ』と言う日が来る。つまり、これから大変な受難の期^{とき}がくる。神の審判を受けるときがくる。そういうことを言われるわけです。そして、32節に二人の犯罪人のことが出てくる。片一方はイエスを罵^{ののし}る。それに対してもう一方はそれをたしなめる。その十字架の上でイエスが七つほどいろいろな言葉を仰っている。その一つがここに出てきます。

「³⁴「そのとき、イエスは言われた。「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです。」

この執り成し、赦しの祈り、これがルカでは出てきます。

³⁹十字架にかけられていた犯罪人の一人が、イエスをののしった。「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ。」⁴⁰すると、もう一人の方がたしなめた。「お前は神をも恐れないのか、同じ刑罰を受けているのに。」⁴¹我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない。」⁴²そして、「イエスよ、あなたの御国においてになるときは、わたしを思い出してください」と言った。⁴³するとイエスは、「はつきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」と言われた。

⁴⁴既に昼の十二時ごろであった。全地は暗くなり、それが三時まで続いた。⁴⁵太陽は光を失っていた。神殿の垂れ幕が真ん中から裂けた。⁴⁶イエスは大声で叫ばれた。「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」こう言うて息を引き取られた。⁴⁷百人隊長はこの出来事を見て、「本当に、この人は正しい人だった」と言うて、神を賛美した。⁴⁸見物に集まっていた群衆も皆、これらの出来事を見て、胸を打ちながら帰って行った。⁴⁹イエスを知っていたすべての人たちと、ガリラヤから従って来た婦人たちとは遠くに立って、これらのことを見ていた。」（ルカ23・26～49）

ここではイエスが十字架の上で、「彼らを赦してやってくださいと、それから一人の盗賊に向かって、

「お前は今日、私と一緒にパラダイスだ」

と言われた。そして息を引き取られる時に3時頃、

「⁴⁶イエスは大声で叫ばれた。「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」こう言うて息を引き取られた。」



こういう記述なんです。あの有名な

「わが神、わが神、なんぞ我を棄て給いし」

というのが全然、ルカでは出てきませんね。それはどこに出てくるかというと、マタイ、マルコに出てくる。

マタイ伝では27章45節です。

「⁴⁵さて、昼の十二時に、全地は暗くなり、それが三時まで続いた。⁴⁶三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。⁴⁷そこに居合わせた人々のうちには、これを聞いて、「この人はエリヤを呼んでいる」と言う者もいた。

これは註解書を読みますと、この「エリ、エリ」というのは

「あつ、エリヤを呼んでいる」

と聞こえたのだろうと言う学者もいるということで紹介してありましたが、ひよつとしたらそうかも知れませし、そうでなくても、エリヤというのは最高の預言者でした。

⁴⁸そのうちの一人が、すぐに走り寄り、海綿を取って酸いぶどう酒を含ませ、葦の棒に付けて、イエスに飲ませようとした。⁴⁹ほかの人々は、「待て、エリヤが彼を救いに来るかどうか、見ていよう」と言った。⁵⁰しかし、イエスは、息を引き取られた。

この「再び大声で」、何を叫ばれたのか、これはわからない。そして息を引き取られた。

⁵¹そのとき、神殿の垂れ幕が上から下まで真つ二つに裂け、マタイ伝ではそこからまた不思議なことを書いている。

地震が起こり、岩が裂け、⁵²墓が開いて、眠りについていた多くの聖なる者たちの体が生き返った。

これは私はちよつと信じられないですね。

⁵³そして、イエスの復活の後、墓から出て来て、聖なる都に入り、多くの人々に現れた。⁵⁴百人隊長と一緒にイエスの見張りをしていた人たちは、地震やいろいろの出来事を見て、非常に恐れ、「本当に、この人は神の子だった」と言った。

それはだいたい時間が経ってから話です。でなくてやはり、ルカが言っているように、神殿の幕が裂けても真つ暗になつてもいいですが、

「わが霊を聖手にゆだねます」

と、それで終わる。それを見ていた百卒長が

「ああ、この人は素晴らしい人だ」

と、そのほうが自然ですね。なんでここで地震が——まあ地震は結構ですけども——墓



が裂けていろんな人が甦って都の中をウロウロ歩き回った、それを見て初めて「この人は義人だった」と、そんなことはないですよ。もうその場で息を引き取られた姿を見て、「ああ、この人は素晴らしい人だった」と、百卒長は感動した。それから女性たちも感動した。そうでない、この真ん中に入っているのは余計なことと、私は思っております。

⁵⁵またそこでは、大勢の婦人たちが遠くから見守っていた。この婦人たちは、ガリラヤからイエスに従って来て世話をしていた人々である。」(マタイ27:45-55)

と。そして、お墓に葬られる場面が次に出てくるわけです。

マルコ伝も、この「岩が裂けて云々」というのはないけれども、他はほとんど一緒です。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」と叫ばれ、「無言の大音聲おんじようを発した」という。この「無言の大音聲」というのは小池先生の讚美歌(A5「わがみ神よ」)の中に出てくる。「やがて続く大音聲」という〔註〕十字架の主は叫べり、エリエリレマ、サバクタニ。更につづく大音聲おんじよう、聖所の幕は裂けたり〕。

●墓に葬られる

次は墓に葬られる場面になりますが、そこはマタイで見ますと、「アリマタヤのヨセフ」というのが登場します。27章57節、

「⁵⁷夕方になると、アリマタヤ出身の金持ちでヨセフという人が来た。この人もイエスの弟子であった。

ヨハネ伝とマタイ伝に、「アリマタヤのヨセフはイエスの弟子である」とはつきり書いてある。ところが、ルカ伝ではそれが全然出てきません。

⁵⁸この人がピラトのところに行つて、イエスの遺体を渡してくれるようにと願ひ出た。そこでピラトは、渡すようにと命じた。⁵⁹ヨセフはイエスの遺体を受け取ると、きれいな亜麻布に包み、⁶⁰岩に掘った自分の新しい墓の中に納め、

マタイ伝ではヨセフはイエスの弟子であるということと、非常に身分の高い議員でもあるわけです——「議員」というのはここには出てこないが、他では「議員」とはつきり出てきます——そして、自分で用意していた新しい墓にイエスを葬った。

墓の入り口には大きな石を転がしておいて立ち去った。⁶¹マグダラのマリアともう一人のマリアとはそこに残り、墓の方を向いて座っていた。」(マタイ

27:57-61)

マルコのほうでは、15章42節です。

「⁴²既に夕方になった。その日は準備の日、すなわち安息日の前日であったので、安息日の前日」、つまり金曜日です。そのうちに全部やらなければならない。安息日になりますと、何もしてはならないわけです。



43 アリマタヤ出身で身分の高い議員ヨセフが来て、勇気を出してピラトのところへ行き、

「勇気を出して」と書いてある。「大胆にも」とか訳されています。

イエスの遺体を渡してくれるようにと願い出た。この人も神の国を待ち望んでいたのである。44ピラトは、イエスがもう死んでしまったのかと不思議に思い、百人隊長を呼び寄せて、既に死んだかどうかを尋ねた。45そして、百人隊長に確かめたうえ、遺体をヨセフに下げ渡した。46ヨセフは亜麻布を買い、イエスを十字架から降ろしてその布で巻き、岩を掘って作った墓の中に納め、墓の入り口には石を転がしておいた。47マグダラのマリアとヨセの母マリアとは、イエスの遺体を納めた場所を見つめていた。(マルコ15・42～47)

こんなふうに、割合にヨセフという人のことを好意的にここでは書いています。

ルカのほうは、先程見た所を確認しますと、ヨセフのことをどう言っているでしょうか。23章50節です。

「50さて、ヨセフという議員がいたが、善良な正しい人で、これも好意的ですね。

51同僚の決議や行動には同意しなかった。ユダヤ人の町アリマタヤの出身で、神の国を待ち望んでいたのである。52この人がピラトのところに行き、イエスの遺体を渡してくれるようにと願い出て、53遺体を十字架から降ろして亜麻布で包み、まだだれも葬られたことのない、岩に掘った墓の中に納めた。

「アリマタヤのヨセフの所有」とは書いてない。新しいまだだれも葬られたことのない、岩に掘った墓の中に納めた。

54その日は準備の日であり、安息日が始まるうとしていた。(ルカ23・50～54)ということが終わっています。

ところが、ヨハネのほうへ行きますと、このヨセフに対してやや厳しい判断をしているように私は思います。19章26節に、十字架上の言葉で、

「26イエスは、母とそのそばにいる愛する弟子とを見て、母に、「婦人よ、御覧なさい。あなたの子です」と言われた。27それから弟子に言われた。「見なさい。あなたの母です。」……28この後、イエスは、すべてのことが今や成し遂げられたのを知り、「渴く」と言われた。……30イエスは、このぶどう酒を受けると、

「成し遂げられた」と言い、頭を垂れて息を引き取られた。

と。わが

「事畢りぬ」
おわ

と文語訳ではなっています。私のやるべき事はこれで全部終わった、「成し遂げられた」と。そのあと、亡骸をどうしたかというと、



³¹その日は準備の日で、翌日は特別の安息日であったので、ユダヤ人たちは、安息日に遺体を十字架の上に残しておかないために、足を折って取り降ろすように、ピラトに願ひ出た。³²そこで、兵士たちが来て、イエスと一緒に十字架につけられた最初の男と、もう一人の男との足を折った。

死体でないと引き下ろせない。しかしながら、死なないで生きていると、そのまま置いておかなければならない。それが安息日にかかってしまいますと、これは下ろせない。だから、なんとか金曜日のうちに決着をつけようと、そのためには足を折ると早く死ぬそうです。それで、二人の足を折った。今度はイエスのほうを見てみると、もう亡くなっていたという。

³³イエスのところに来てみると、既に死んでおられたので、その足は折らなかつた。³⁴しかし、兵士の一人が槍でイエスのわき腹を刺した。

これもまたヨハネ伝だけなんですけれども、腹を突いたら血と水とがそこから吹き出たということが出てくる。

すると、すぐ血と水とが流れ出た。³⁵それを目撃した者が証しており、

この「目撃した者」がヨハネだという。

その証しは真実である。

というのは、別の人が言っているということ、これはあとからの挿入だというようなことが言われている。

その者は、あなたがたにも信じさせるために、自分が真実を語っていることを知っている。

というのは挿入だという。

³⁶これらのことが起こったのは、「その骨は一つも砕かれない」という聖書の言葉が実現するためであった。³⁷また、聖書の別の所に、「彼らは、自分たちの突き刺した者を見る」とも書いてある。

これはゼカリヤ書（12・10）に出てくる言葉です。

³⁸その後、イエスの弟子でありながら、ユダヤ人たちを恐れて、そのことを隠していたアリマタヤ出身のヨセフが、

この書き方がいかにも「怪しからん奴だ。人の前で公言しないで、こっそりお弟子だやっている」と。これは私のひがみかも知れませんが、そういう感じを受ける。「イエスの弟子でありながら、ユダヤ人たちを恐れて」とある。ユダヤ人たちはイエスを十字架につけることに賛成しますから、それに対する恐怖で、恐れてイエスの弟子であることを隠していた。こういう「アリマタヤ出身のヨセフ」、本当はそうなのかも知れませんが、

イエスの遺体を取り降ろしたいと、ピラトに願ひ出た。ピラトが許したので、ヨセフは行って遺体を取り降ろした。³⁹そこへ、かつてある夜、イエスの



とに來たことのあるニコデモ、

3章の所で、夜こつそり「神があなたとご一緒でないと、あなたがなさっているような御業^{みわざ}は誰もできません」なんて言つて、やつて來たニコデモです。

没藥と沈香を混ぜた物を百リトラばかり持つて來た。

「百リトラ」は、註解書で見ると、30kgだという。30kgをどうやつて持つてきたか。

⁴⁰ 彼らはイエスの遺体を受け取り、ユダヤ人の埋葬の習慣に従い、香料を添えて亜麻布で包んだ。⁴¹ イエスが十字架につけられた所には園があり、そこには、だれもまだ葬られたことのない新しい墓があつた。⁴² その日はユダヤ人の準備の日であり、この墓が近かつたので、そこにイエスを納めた。」(ヨハネ19・26～42)

まあこんなことで、とても駆け足で不完全ながら、どんな情景かということを見てきました。しかも、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ、みなちよつとずつ違つている。だから、そのどれが客観的に正しいかなんていうことではなく、それらを通して一体何が語られているのか。それは私たちにとっていかなる意味があるのか。そちらでむしろ受けとつていくべきだろうと思います。

要するに、ピラトがいれば第三者的な立場で——彼は宗教に関係ないわけですから——そのピラトから見て、「絶対、この人には罪はない」と、ピラトが言っているのにもかかわらず、ユダヤ人たちは

「十字架につけろ、十字架につけろ。とにかく、イエスを十字架につけろ」

と、まるで群衆心理に煽^{あお}られるようにして、多くの者がそれに賛同して、イエスを十字架につけて殺した。そのことは既にイザヤ書53章で預言されていたわけです。

● 屠り場に引かれる小羊(イザヤ53章)

私はこのヨハネ伝をずうつと読んで、「ああこれはイザヤ書そのものだな」と思った。ですから、ちよつとここでイザヤ書53章を開いていただきたく思います。

「わたしたちの聞いたことを、誰が信じようか。主は御腕の力を誰に示されたことがあるうか。² 乾いた地に埋もれた根から生え出た若枝のようにこの人は主の前に育つた。見るべき面影はなく輝かしい風格も、好ましい容姿もない。³ 彼は軽蔑され、人々に見捨てられ多くの痛みを負い、病を知っている。」

このへんの叙述は、ガリラヤ伝道で颯爽^{さつそう}として生き生きとしておられたイエスのお姿ではなくて、正にこの十字架を、捕まえられて侮辱されて、散々な目に合わされているお姿を想定している預言のように思える。

見るべき面影^{おもかげ}はなく輝かしい風格も、好ましい容姿もない。



散々痛めつけられ、侮辱され、鞭打たれ、茨の冠をかぶせられ、唾せられて、そういう情景です。

³彼は軽蔑され、人々に見捨てられ多くの痛みを負い、病を知っている。彼はわたしたちに顔を隠しわたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。⁴彼が担ったのはわたしたちの病彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのにわたしたちは思っていた神の手にかかり、打たれたから彼は苦しんでいるのだ、と。

彼らが信じたのは、「神を冒瀆する」という罪ですね。だから、それは当然、死罪に当たると言つて、散々侮辱して、なぶりものにしたというわけですよ。

⁵彼が刺し貫かれたのはわたしたちの背きのためであり彼が打ち砕かれたのはわたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによってわたしたちに平和(平安)が与えられ彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。⁶わたしたちは羊の群れ道を誤り、それぞれの方角に向かって行った。そのわたしたちの罪をすべて主は彼に負わせられた

ここにありましたね、方向転換の前の段階です。

⁷苦役を課せられて、かがみ込み彼は口を開かなかった。屠り場に引かれる小羊のように毛を刈る者の前に物を言わない羊のように彼は口を開かなかった。⁸捕らえられ、裁きを受けて、彼は命を取られた。彼の時代の誰が思い巡らしたであろうかわたしの民の背きのゆえに、彼が神の手にかかり命ある者の地から断たれたことを。⁹彼は不法を働かずその口に偽りもなかったのにその墓は神に逆らう者と共にされ富める者と共に葬られた。

「富める者」というのは、「審きを受ける者」ということですから、そういう者と一緒に葬られた。

¹⁰病に苦しむこの人を打ち砕こうと主は望まれ彼は自らを償いの献げ物とした。彼は、子孫が末永く続くのを見る。主の望まれることは彼の手によって成し遂げられる。¹¹彼は自らの苦しみの実りを見それを知って満足する。わたしの僕は、多くの人が正しい者とされるために彼らの罪を自ら負った。¹²……彼が自らをなげうち、死んで罪人のひとりに数えられたからだ。多くの人の過ちを担い背いた者のために執り成しをしたのはこの人であった。」

(イザヤ53・1～12)

正にこのイザヤ書53章は、預言者は何も知らないで預言している。それがああいう形で成している。マタイ伝にありましたように、イエスが「いやだ」と仰れば、それで済むんですよね。天から十二軍団を呼ぶこともできる。それをあえて何もなさらないで、罪びとの手にかかり、自らを渡し、しかもヨハネ伝10章によりますと、



「人が私から命を奪うのではない。私自ら命を捨てるのだ。私には命を捨てる権も得る権もある。」（ヨハネ10・18）

「私は自分で十字架を選ぶ」

ということをやヨハネ伝の中で言っておられる。だから、決してイエスはその罪を人々になすりつけようとはなさっていない。むしろ、

「父よ、彼らを赦し給え。彼らは自分のやっている事がわからないからです」

と、この執り成しの祈りをなさっている。私はその姿に打たれてしまう。人は正当な審きを受けて、やられてもやはり辛いでしょ。十字架の片一方の盗賊が、

「自分たちがこんな目に合うのは当然の報いだ。しかし、この方は全く違う」

と言いました。そういう全く人のことだけを考え、神さまのことだけを考えて、生き抜かれた方がこんな酷い目に合わされるとは、何のためか。いったい神の義はどこにあるのかと。小池先生はあの、

「エリ、エリ、サバクタン。わが神、わが神、なんぞ我を棄て給いし」

というところを、

「これはキリストの義の叫びだ。あなたの御意にここまで従い切った私を棄てて、

あなたの義が立つんですか!？」

というプロテストだというふうに受けとられた。私は必ずしもそうとは思いませんけれども、そういうふうに小池先生は言われました。

とにかく、キリストは神の御意だけを貫いて生きられた。その御意の終りはなんとこの十字架という無惨なもの。しかもその前夜から始まって、ああいう夜からその次の朝、そして午後3時に息を引き取られるまでのその時間というのは実に残酷な、侮辱の極み、痛みの極みです。それをあえて耐え抜かれた。しかし、そのあとに復活という凄いものが待っているわけです。イエスはそのことをちゃんと知っていたらっしゃるのに違いない。

ですから、イエスの中に宿っている聖霊がすべてを耐えさせたのだと私は思います。イエスは決して自分の意志の力とか、自分の強さで耐えられたのではなくて、イエスの中に宿っていた聖霊がすべてを荷になわされたと、私は思う。御意に従うというイエスのお心と、それからイエスの中で支えておられた聖霊がイエスをしてあのような贖罪の死を遂げさせなされたのだと私は思います。しかも、それは誰のためかという点、正に我々のためなんです。

この世の中にはいろんな不可解な事とか、不合理なこととか、不条理なことがあります。「何でこんなことが？」ということがいろいろありますけれども、それはこのイエスが歩まれた道、そしてイエスの最後のこの十字架の場面、前夜から始まって十字架の上の

「父よ、彼らを赦し給え。わが霊を聖手にゆだね」

と、あのところを見ますと、やはりこの世というのはゆがんだ世なんです。この世はま



ともな世ではない。ところが、イエスさまの住んでおられる世というのは、天の国、神の国という、これが地にも成るようというのがイエスのお心だったわけです。これが浸透して、この世を引っくり返すようにと。けれども、それは成らなかったけれども、なお祈り続けていらつしやると思えます。私たちは世に属していながら、世から脱して、神さまのもとへ引き寄せられていく。

「私が十字架にかかって天に昇ったら、必ず皆を引き寄せる」

と仰った。ですから、私は申したいけれども、人間のプロセスとしたら、心の碎けから始まって、方向転換があり、悔い改めに行つて、そしてお弟子になつていくんですけれども、それらを促して^{うなが}くださるのは全部、初めにキリストのこの世での御業があつたということ。ひとえに私たちに本当の生命を与えるために、イエスはあの生涯を貫かれたわけです。しかも、イエスのご生涯をふり返つてみますと、まず生まれは馬槽^{うまぶね}の中ですよ。実に最低の生まれ方をなさっている。それから最後は、あの罪びとの首^{かしら}となつてあのような死を遂げておられる。始めも悪いし、終りも悪い。「終りよければすべて良し」と言いますけれども、終りも悪い。

我々はどんなに苦勞しても、終りが良ければ、「まあまあ、やつぱり良かったのではないか。苦勞が報われたのではないか」と言うが、イエスのご生涯を見てたら、何も良いことはない。真ん中だつて、本当に民衆たちはイエスの心をわかつていない。御利益的にしか受けとらない。本当に神の御意を思わない。ペテロだつて、あのように「あなたと一緒に死にます」と言いながらも逃げてしまうようなものでしょ。そういう思いですから、我々人間というのはいかに弱くて罪深いかということがこれでよくわかる。

イエスという鏡に照らして見て初めて我々の姿がわかる。イエスという鏡がなければ、「あいつよりわしのほうがまだましや」とか、「あいつは悪いのになんで榮えているんや」とか、そういうレベルでしか我々は判断できない。公平・不公平とか、みんなそうなんです、相対的判断です。けれども、イエスというお方の生涯を鏡にして投影して見たときに、それはやはり解けてくる。しかも、この世では解けない。向こうへ行つて本ものの世界が実現する。

あの、金持ちの家の前で、出来物ができて、犬にねぶられながら、かろうじて命をつないでいたラザロ、これがアブラハムの懷へ連れて行かれた。金持ちは大盛んな葬式をしてもらうけれども、逝つてみたら地獄だった。はるかに見たら、アブラハムの所でラザロが憩っている。「おーい、ラザロよ、来てくれよ!」なんていう場面が出てきます。あれは譬え話です。でも、あれは譬えでありながら本当ですよ。そういうもんなんです。

ですから、やはり私たちは福音書に来て、イエスというお方にぶつかつて初めて神さまとはどういうお方なのか。神さまの御意^{みこころ}をイエスはどのように現していかれたのか。そして、どのように生き、どのように死なれたのか。これが私たちの鏡です。しかも、死で終わつ



ていない。死をもって死を滅ぼし、死をもって病を滅ぼし、本当の永遠の生命をご復活という姿によって現された。これが凄い。これが、「終り良ければすべて良し」になるわけです。だからもしも、あのご復活という事態がなければ、全くイエスの弟子であることは空しい。これはヒルティがはつきり言ってます。

「イエスがもしも死につばなしであつたら、誰がいったいイエスの弟子になろうなんていう思いを起こせるだろうか。だから、復活がすべてである」

と、ヒルティは『幸福論』の中で言ってます。弟子たちの伝道もそうだと。まず彼らはシヨボンとしていた。ところが、復活されたイエスが現れてきた。エマオの途上で現れた。その他、たびたび現れて弟子たちを励まされた。そして、聖霊を授けた。それで弟子たちは甦った。弟子たちの伝道の一番は、

「お前たちが十字架につけて殺したあのイエスを神が甦らせて、これを主としてお立てになった。我々はその証人である」

と。「復活が伝道のすべてだ」とヒルティは言います。私はさらに、復活だけではなくて、そののちに聖霊を降し給うという、これで私たちはこの復活プラス聖霊ということ、このイエスが歩まれた次元にやつと辿りつくわけです。だから、次のペンテコステ、聖霊降臨が決定打になるわけです。

「私が父の御許みもとに行けば、聖霊を降す。行かなければ、助け主は来ない。だから、私が父の御許に行くことは、あなた方にプラスになる。あなた方は今、憂い悲しんでいる。しかし、その悲しみ憂いはやがて喜びに変わる。女は産む前には苦しむ。しかし、産んでしまえば、そこに喜びしか残っていない。もう痛みは過ぎ去る。それと同じことになる。私は父の御許に行くけれども、やがて帰ってくる。あなた方と世の終りまで永遠にあなた方と一緒に、一人びとりの中に一緒に、中に入る。そして一緒に歩いて行く」

と。私にとっては、信仰というのは自分から出ない。このイエスがすべてなんです。イエスが一切をなしてくださっている。そのイエスが一切をなしてくださって、迫ってきてくださって、引き寄せてくださっている。それに気づいたただけなんです。きっかけはやはり自分の悲しさです。自分の無力さです。自分の罪深さです。それが罪の問題であるか、病の問題であるか、自分の運命であるのか、何であるのか。それは人によって違うでしょう。どこかの段階で行き詰まって、

「もうこれはだめだ。もう死ぬほかない。夢も希望もないわ」

というどん底に光が射してくる。そして、引き上げてくださる。死の床から引き上げてくださる。復活させてくださる。そこから新しい人生が始まるんです。

「人新たに生まれずば、神の国を見ることあたわず。神の国に入ることあたわず」



と。そういうことを今日は非常に暗い場面をずっと眺めてきたけれども、そしてその次には新しい朝がくる。私たちは人生でどんな目に合いまして、どんなことを経験しましても、これで終りではない。その先が開けている。闇が深ければ、光はもつと強い。そこへ我々を変貌させてくださる。これが、あの十字架の場面から次の復活の場面へと展開する福音書が我々に告げている音信だおとずれと思う。だから、記事のいろんな食い違いはどうでもいい。そこで語られていることはそうなんだと、これをしっかり受けとっていただきたいというのが私の感想です。でも、一応、記事はどうなっているかということが気になりますから、こうやっていかにも学者らしく辿つてみましたけれども、へぼ学者ですけれども（笑）。

● 祈り

一言お祈りいたします。

主イエス・キリストさま、万物が甦るこの春、本当に自然界は桜が咲き、新緑が萌えています。今日は実に深刻なところを皆さんとご一緒に味わうことができました。しかし、この深刻なあとに本当のあなたの朝がやってまいります。あなたは実に甦られた。永遠の生命を現してくださった。しかも、あなたがこの一番深刻な事態を私たちに代わって受けとってくださった。私たちをその苦しみから解き放してくださいだったのでございます。私たちはもうすべて、

「誰でもキリストの中にあるならば新しく創られたものである、旧きは過ぎ去った。見よ、一切は新しくなった」

と言われる、その本当の新しいの中へとあなたの御業によって入れていただきました。ですから、私たちの理性が何と言おうと、感情が何と反発しよう、あなたがなしたもうたことは動きません。そして、あなたは今も生きておられます。聖名を呼ぶ者の中にあなたは宿ってくださいいます。そして、私たちをつかまえて、聖霊という霊の、愛と御力そして希望をもって、私たちを前へ前へと進ませてくださるので、感謝いたします。

我々は病に臥せったり、また苦難に出会ったり、迫害に合ったり、誤解を受けたり、いろんなことがこの世で起こりますが、そういうものに直面しても、主よ、あなたはそれらを全部ご存じで、自らそれを負ってくださいいました。だから、私は独りではありません。あなたがいつもご一緒にいてくださいました。聖名を呼び、聖名を讃え、そして我々の思いを率直にあなたに申し上げて、あなたと一つとされて歩んで行きたいでございます。

どうぞ、ここに集われたお一人お一人をあなたが祝福し、そしてあなたが導いてください。この感謝と讃美と祈りをイエス・キリストの聖名をとおして御前にお捧げいたします。アーメン

